

# テイル用法の普遍的習得順序について

## － 年齢・環境要因に起因する共通性と差異 －

橋本 ゆかり

### 要 旨

許(2001)は、テイルの 8 用法について日本語を第二言語とする成人の普遍的習得順序を提示している。本稿では、年齢が異なり、自然に習得される場合においてもテイルの意味用法が同じ習得順序で習得されるのかを検討するために、日本語を第二言語とする幼児を対象にどのようにテイルの意味用法が習得されるのかについて調査した。その結果、4 用法のみが産出され、「運動の持続－長期」、「結果の状態」、「繰り返し」、「運動の効力」の順に習得されることが明らかとなった。年齢要因、環境要因によりテイルのプロトタイプ及び習得順序が異なることを指摘した。

### 【キーワード】

普遍的習得順序 固まり 参照点 年齢要因 プロトタイプ判断指標

### 1. はじめに

アスペクトの習得研究において、1990 年代以降、テイル形(以下、テイル)の意味用法の習得に焦点が絞られ、日本語を第二言語(以下、L2)とする成人(以下、L2 成人)対象に研究が行われ習得順序が提示されている。習得順序を明らかにすることは、学習者が実際にどのように習得を進めているのかといった習得メカニズムの解明に貢献できると考える。

### 2. 先行研究と研究目的

アスペクトとは、出来事の時間的展開性の把握の仕方の相違を表す文法的カテゴリーで、アスペクト表現のテイルは継続の意味を表す。テイルの代表的な意味用法は「動作の持続」と「結果の状態」の 2 用法とされ、用法間の習得順序は「動作の持続」が「結果の状態」よりも早いということである(許 2001；黒野 1995；小山 1998；菅谷 2002；Shirai & Kurono 1998 等)。許(2001)は、テイルの意味用法を 8 つに細分化し、中国語、韓国語、英語母語話者 30 名ずつの KY コーパスを分析し普遍的習得順序を提示している。この習得順序はプロトタイプ理論を応用したものである。プロトタイプ理論(Rosch 1973)は、人間のカテゴリー認知の仕方に関するモデルで、カテゴリーはプロトタイプ(中心的)成員と非プロトタイプ成員により連続性をもって形成されるという考えに基づく。許(2001)は、「現在性」「持続性」「運動性」がテイルのプロトタイプを形成する意味素性であるとし、この 3 つの典型的意味素性をどのくらい兼ね備えているかに基づいて、習得順序を決定している。以下に、許の提示したテイルの普遍的習得順序を示す。上から意味素性を多く含んでいるもの

の順となり、多く含むものがテイルのプロトタイプであり早期に習得され、次第に他の用法へ習得が進んでいくということである。

#### テイルの普遍的習得順序 (許 2001)

- 1 「運動の持続＋長期」 ex. 勤めている  
〔現在性、持続性、運動性〕
- 2 「運動の持続－長期」 ex. 見ている  
〔持続性、現在性、運動性〕
- 3 「性状＋可変性」 ex. はやっている  
〔持続性、現在性、運動性〕
- 4 「性状－可変性」 ex. 似ている  
〔持続性、現在性、(運動性無)〕
- 5 「繰り返し」 ex. よく読んでいる  
〔運動性(持続性無、現在性弱)〕
- 6 「結果の状態」 ex. 壊れている  
〔持続性(運動性無、現在性少し弱)〕
- 7 「状態の変化」 ex. 大きくなっている  
〔(持続性、現在性、運動性全て弱)〕
- 8 「運動の効力」 ex. 山に登っている  
〔(持続性無、現在性無、運動性弱)〕

許の提示した習得順序に基づいて、L2 成人を対象とした縦断的調査と、日本語母語話者の幼児(以下、L1 幼児)を対象とした調査報告がある。菅谷(2001)は、テルグ語、マラティ語、ロシア語を母語とする成人学習者に対し縦断的調査を行い、教室学習者においてはほぼ一致する結果を得ている。自然習得者は調査初期から「運動の持続－長期」と「結果の状態」を産出していたということである。L1 幼児を対象とした調査(橋本 2004)では、「運動の持続－長期」の習得が最も早くテイルのプロトタイプであり、「運動の効力」の習得が最

も遅いという報告がなされている。また、「結果の状態」が頻繁に観察されたことから許が提示したもののより習得順序が早いと推測されている。この習得順序は、年齢が異なり、また教室学習ではなく自然に習得する学習者にもあてはまるであろうか。本稿では、L2 幼児を対象とし、テイルの意味用法がどのように習得されていくのかについて検討したいと考える。

### 3. 研究課題

L2 幼児において、テイルは、どのようにして習得されていくのか。また意味用法はどのような順序で習得されていくのか。

### 4. 調査資料

調査対象児：調査対象児 K 児(調査開始時点 3 歳 6 ヶ月)は中国生まれの英語を母語とする英国人女児である。家庭の使用言語は英語のみで、母親によれば、来日(来日時 2 歳 9 ヶ月)後入園(入園時 3 歳 0 ヶ月)までは英語母語の友達と遊んでいたという。入園後半年は、幼稚園の先生によれば、英語/日本語バイリンガルの友達と常に一緒に英語を使用することが多かったということである。日本語との接触は、月に 1 回ほど幼稚園の友達と遊んだり、家で時々 30 分ほど子ども番組を見たりする程度であったという。

調査：本稿では 2003 年 9 月～2004 年 7 月の調査資料を分析した。調査時間は 1～3 時間/回で、調査頻度は 2 週間に 1 度を基準にした。IC レコーダーに録音すると共に発話メモをとった。

文字起こし：発話メモを照合させながら録音した発話の文字起こしを行った。

### 5. 分析方法

L2 幼児のテイルの意味用法の習得プロセスと習得順序を明らかにするために、記述分析と数量的分析を併せて行う。数量的分析は以下の通りとする。

1. 文字起こしした資料から、述部にテイル<sup>2</sup>が使用されている文を抽出する。
2. 許(2001)の 8 用法の分類に基づいて意味用法のコーディングを行う。
3. 用法ごとに、出現時期、正用産出数、5 つの異なる動詞による産出時期を調査する。正用産出数については、時間あたりの平均正用産出数を 1 ヶ月ごとに算出する。出現時期の早い順、正用産出数の多い順、及び 5 つの異なる動詞による産出が早い順という 3 つの判断基準をプロト

タイプ及び意味用法間の習得順序決定の指標とする。

### 6. 結果と考察

ル形・タ形は、初期より産出されるが、テイルは調査 3 回目に産出される。テイタ形の産出はその後となる。ル形・タ形⇒テイル⇒テイタ形と習得されることが明らかになった。

「運動の持続+長期」は、初期に、名詞、あるいは名詞+コピュラによって表現されていた。名詞は事象の中で認知的際立ちがあるがゆえに先に習得され、これを活用し事象の意味を表そうとしていることが考えられる。ゲシュタルト的事態把握により 1 語の名詞で事象が表現されたと考えられ、名詞が参照点となっている(橋本 2005)。さらには「こう」や「こうやって」などと指示詞を用いて事態が表現されていた。また、ル形で表現されていることも確認された。この結果は黒野(1995)でも指摘されている。

産出されたテイルの用法は 4 用法のみで、TL 産出数の多い順で考えると「運動の持続+長期」⇒「結果の状態」⇒「繰り返し」⇒「運動の効力」となり、出現時期の早い順で考えると「運動の持続+長期」⇒「結果の状態」⇒「繰り返し」⇒「運動の効力」、5 つの異なる動詞による産出時期の早い順で考えると、「運動の持続+長期」⇒「結果の状態」という順になる。以上の結果を考え合わせると、L2 幼児のテイルの習得順序は、「運動の持続+長期」⇒「結果の状態」⇒「繰り返し」⇒「運動の効力」ということになる。「運動の持続+長期」が最初に産出され、「運動の効力」が最後に習得される。さらに「結果の状態」が許の提示した順序よりも早い点において L1 幼児と極めて似ている習得順序であるといえる。テイルの代表的 2 用法で考えると、「運動の持続+長期」(「動作の持続」に相当)が「結果の状態」よりも先に習得するという先行研究の結果を支持するものであった。

許の用法で産出されなかったのは、「運動の持続+長期」、「性状土可変性」、「状態の変化」である。「運動の持続+長期」は、「勤めている」、「住んでいる」等で語彙として難しいことが考えられる。こういった用例は、状態性述語のように固まりとして習得がなされることが考えられる。「性状土可変性」も、「満足している」、「似ている」、「太っている」、「迷っている」、「落ち込んでいる」、「流行っている」等がこの分類に含まれるが、抽象性が高いために幼児には難しいということが考えられ、やはり状態性述語のように 1 つの固まりとして習得されていくことが推測される。L2 成人及

び L1 幼児についての先行研究(許 2001; 橋本 2004 等)においても固まりとして習得されることが指摘されている。また、「状態の変化」は、「大きくなっている」等の動詞と補助動詞との結合表現が形態的に複雑性を伴うために、幼児にとっては難しいと考えられる。

さらに許と異なる結果は、「結果の状態」が「繰り返し」よりも早く習得されたということである。「繰り返し」は、過去の複数の出来事、あるいは過去、現在の出来事が同一であると認知しなければならず、過去のことをも含み包括的に考える必要がある。抽象性に由来する難しさがあり、さらに過去への言及が現在のことよりも強いということが考えられる。また、「結果の状態」は過去のことと及ぶが、現在のことを焦点化した表現であるともいえる。例えば、「落ちている」等は現在の目の前の事象について述べられた表現であり、具体性が高いために習得が早いということが考えられる。プロトタイプ素性の「現在性」が「繰り返し」よりも強いということが考えられる。「運動の効力」は以前完成した運動をまるごとの姿で捉え吟味しようという心理であり、過去の出来事を客観的に判断する用法(許 2001)であるため、難しいとされており、本稿においても最後に産出された。

## 7. まとめと今後の課題

テイルの意味用法の習得順序における L2 幼児と L1 幼児間の共通性は、幼児が目の前の事象に関する表現から習得を進めていることに起因するのかもしれない。L2 幼児の習得は L2 成人よりも L1 幼児の習得と近いことが考えられる。しかし、菅谷(2001)では、成人の自然習得者が「運動の持続—長期」「結果の状態」を初期から産出していたことを報告している。「結果の状態」が許が提示した順序よりも早期に習得されるのは、自然習得であることに起因するのかもしれない。この点についてはさらに検討する必要がある。本稿は L2 幼児 1 名を対象としており、一般化できないため、調査対象者を増やして検討したい。

付記：本稿は、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科言語文化専攻 2004 年度修士論文「幼児のテンス・アスペクトの習得に関する縦断研究—第二言語におけるアスペクト仮説と定式表現」と同じデータと分析指標を用いたが、分析枠組みは異なるものである。

## 参考文献

- 許夏珮 (2001) 「日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得に関する研究」お茶の水女子大学大学院博士学位論文  
 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房  
 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者における「-テイル」の習得について」『日本語教育』 87, 153-164.  
 小山悟 (1998) 「日本語学習者のテンス・アスペクトの習得」第 9 回第二言語習得研究会全国大会発表原稿, 名古屋大学 12 月 20 日  
 菅谷奈津江 (2001) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究：テイルを中心に」お茶の水女子大学大学院修士論文(未公開)  
 菅谷奈津江 (2002) 「日本語のテンス・アスペクト習得に関する事例研究」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成 12-13 年度科学研究費研究成果報告書 課題番号 12878043 研究代表者 長友和彦 102-114.  
 橋本ゆかり (2004) 「日本人幼児 5 歳児のテイル、テイタの習得と使用の事例研究—第二言語習得におけるアスペクトの普遍的習得階層の検討に向けて—」『三言語併用環境における日本語の発達に関する研究』平成 14-15 年度科学研究費補助金研究 課題番号 14658077 研究代表者 長友和彦 139-154.  
 橋本ゆかり (2005) 「幼児のテンス・アスペクトの習得に関する縦断研究—第二言語におけるアスペクト仮説と定式表現」お茶の水女子大学大学院修士論文(未公開)  
 松岡弘監修 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク  
 Rosch, R. (1973) On the internal structure of perceptual and semantic categories, In T.E. Moore (Ed.), Cognitive development and the acquisition of language (pp. 111-144). NY: Academic Press.  
 Shirai, Y. & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language, Language Learning, 48, 245-279.